

ずいそう

大変な時代に、「寅さん」の効用

伊藤 健一



山田洋次監督・渥美清主演の映画「男はつらいよ」は、大阪万博の前年、アポロ11号月面着陸の年である1969年に始まりました。終了したのは、阪神大震災の翌年、1996年です。28年間で48本が封切られました。

私は、映画館公開時にリアルタイムで観ていたわけではありませんが、DVD版全作品が公立図書館に常備され、無料で借りられるようになったことで、1年ほど前から、全編を順番に観賞することにしました。また、地デジ化の副産物として大型テレビが格安で購入できるようになったため、シネマ・スコープの横長スクリーン画面を我家で楽しむことが可能になりました。

第1作が公開された頃、私は小学校6年生でしたが、公開から4年ほど経った頃、高校の文化祭で上映されたものを観た記憶があるだけです。それからさらに30数年経って、改めて観てみると、寅さんも、マドンナも、さくら（倍賞千恵子）も、そのほかの出演者も、みんな若い。また、背景がなつかしい昭和の時代そのものです。

寅さんは毎回、マドンナに恋をするわけですが、私が若い頃に観ていた年上の女優さんたち、吉永小百合、栗原小巻、大原麗子、浅丘ルリ子、松坂慶子、田中裕子、竹下景子、…。今、観てみると、皆さん、映像の中では可憐で美しい。

さて、山田洋次監督は、どうも鉄道マニアらしく、毎回、日本各地のローカル線が登場します。函館本線、五能線、上田電鉄、新潟交通、蒲原鉄道、尾小屋鉄道、京福電鉄、…。ウイーンのトラムまで登場します。

ローカル線だけでなく、首都圏の鉄道や駅前風景も、映像の中ではその時代そのまま生きています。

告白のシーン・別れのシーンなど数々の名場面を生んだ京成柴又駅は、1969年からずっと、映画の中で定点観測です。現在でも駅の構造はほとんど変わりませんが、唯一、改札口だけが自動改札機に変わりました。

初期の作品に登場した上野駅地下の食堂は、国鉄上野駅中央改札口（正面玄関口）から営団地下鉄銀座線

の駅に降りていく途中にありましたが、今はもうありません。

シリーズ終盤では、寅さんには不釣り合いな東海道新幹線がよく登場します。寅さんも年を取り、さくらの息子である満男（吉岡秀隆）が準主役となりました。その満男と泉（後藤久美子）の恋の駆け引きがメインテーマとなり、新幹線がその舞台の一翼を担っています。この当時はJR東海のシンデレラ・エクスプレスがテレビCMで放映されていた時代で、映画の中でも、0系や100系の新幹線が颯爽と走っています。画面の片隅には、工事中の東北新幹線東京駅ホームのオレンジ色の鉄骨が映っています。

東京駅を発車した新幹線の車窓には、新橋あたりで、汐留貨物駅跡地が映っており、高層ビル群が林立する現在のシオサイトがない時代を垣間見ることが出来ます。「男はつらいよ」はまるでタイムマシンのようです。

昔を懐かしんでいるだけでなく、シリーズを通して観ていると、寅さんは要所々々で人生の本質に関わる名台詞を口にしていることに気がつきます。

柴又駅前での寅さんと満男の会話。

満男「人間てさ」

寅「人間がどうした？」

満男「人間は何のために生きてんのかな」

寅「難しいこと聞くな、お前は…何とかな、あー生まれてきてよかった——そう思うことが何べんかあるだろう。そのために生きてんじゃねえか」

今の世の中、何のために生きているのかわからなくなって、自ら命を絶つ人が年間3万人もいます。苦しいときは、この寅さんの台詞を思い出して、肩の力を抜いて、とりあえず、目の前の嫌なことをあの手この手で工夫を凝らして取り除き、少々の無理はしなければならぬかもしれませんが、その後待っている「あー生まれてきてよかった」と思える瞬間を楽しみにしたいものです。

寅さんに言わせると、それは「何べんかある」ということです。